

キリスト教における宗教的共存思想について

——ヒック、デコスタ、ドライヴァー^①——

八 卷 和 彦

はじめに

一 宗教的多元論 religious pluralism

現代のキリスト教界においては、原理主義的セクト以外に、キリスト教以外の宗教を排他主義的な視点から不寛容に扱う教会は存在しないと言つてよいだろう。そこで以下では、キリスト教の側から他の宗教を積極的に容認する動きの代表としての宗教的多元論 religious pluralism についで、それを主導してきたジョン・ヒック (John Hick, 1922-2012) を中心にして紹介すると共に、宗教的多元論を批判しつつキリスト教の独自性の意義を主張する包括主義の典例例について、デコスタの思想を中心に紹介する。その上で、宗教的多元論をもっともドラステイックな形で説いているドライヴァーの思想を紹介する。

1 その前提としての認識

この理論の代表者は、イギリスのヒックである。彼は、若い時から熱心な信者であつて、第二次大戦中は良心的兵役拒否者としてフレンド派の救急班に属したという。戦後の一九六九年から一九八五年にかけては、イギリス第二の工業都市であるバーミンガムで、バーミンガム大学神学部の主任教授として神学と宗教哲学の研究・教育に従事するかたわら、ユダヤ教徒、ムスリム、シク教徒、ヒンドゥ教徒が多数居住するこの都市に設置されていた宗教間協議会で活動した。このような経験にたつて、彼は宗教的多元論を提唱するようになったのである。

彼にはたかさんの著書があるが、ここでは *God Has Many Names* (『神は多くの名前をもつ』一九八〇年) と、彼とニッ

ターとの共編著である *The Myth of Christian Uniqueness* ⁽⁵⁾ に収載されている論文 “The Non-Absoluteness of Christianity” という二種の著作を中心にして、彼の宗教的多元論を紹介したい。

彼には、前記の実験的経験に基づき、信仰についての以下のような大前提があった。「九八〜九九%の人が信じて従う宗教は、その人の出生場所によって決まる」というものである。彼は、この前提を明言する際に、次のような条件をも記している。「かならずしも神学者たちがこのことを考慮しているとはかぎらないが、これは普通の人々には明白な事実である」。

この指摘は、きわめて重要である。本発表の第三章で紹介するドライヴァーも指摘しているように、一地域の住民が特定の宗教を信仰するようになるきっかけは、その地域を支配する王などの改宗によること、歴史的に見れば大部分のケースだからである。これは一九世紀以降の西欧列強の植民地主義によってアフリカやアジアで起こされた事態であるのみならず、古代末期から中世初期の西欧でゲルマン民族がカトリック・キリスト教の信仰をもつようになった際にも起きた事態である。⁽⁵⁾

さらに近代以降の西欧において宗教寛容の原則が確立される上で重要な契機となった一五五五年のアウグスブルクの宗教和議にも、この側面が見て取れる。ここで確認された原則は、*‘Cuius regio, eius religio’* (その地域を支配している王の宗教がその地域の民の宗教となる) というものであったからである。

この宗教和議を経て確立された近代西欧の宗教寛容の思想

は、集団相互の宗教寛容から個人における信仰の自由へと展開した。その結果、現在の西欧の神学者の多くが、信仰とは個人の選択と決断によって成立するものだと考えがちである。しかしながら、実際の信仰の成立状況を冷静に観察すれば、現代においても、ヒックの指摘するように「九八〜九九%の人が信じて従う宗教は、その人の出生場所によって決まる」のである。

この事実から諸々の宗教をとらえるならば、そして地球上に生存している人間は、顔かたちや肌の色が異なっても種としては同一であり、従ってその生得的に有している「能力」が同一であることを前提にするならば、⁽⁶⁾ 多様な宗教のうちのどれか一つが特別にすぐれているという事にはならないと言える。そして、同時にそれは、人間の宗教心が生得的なもの *innate* であり、それゆえに、人間本性が変わらない限り宗教は何らかの形で存続するものであることをも意味することになる。⁽⁷⁾

2 キリスト教をいかにとらえるか

諸宗教に関する右記のような認識に立つて、ヒックは自身の信仰しているキリスト教について、以下のように述べる。「人間は様々な宗教的生活によって究極的実在 *the ultimate reality* と関わり、救われるのだが、キリスト教徒はこの実在を天の父と認識しているのである」⁽⁸⁾。この視点に立つことによって、キリスト教と他の宗教とが万人に生得的なもの *innate* としての「宗教性」の多様な現れの一つであるとして、同一の地平でとらえられることになる。

この認識の背後には、ヒック自身の神という存在に對する深い信仰、およびそれと密接に関わる人間の能力に對する深い反省がある。第一の点について彼は次のように言う。「万物の創造主である唯一の神が存在するが、それは存在の無限の充実と豊かさにおいて人間の思考による把握の試みをすべて凌駕しているのであり、諸々の偉大な世界宗教の信者たちは、事実上この唯一の神を礼拝しているのである」⁹⁾。つまり、人間は同一の神を礼拝しているのだが、その神は、それを把握しようとするいかなる宗教的営みをも凌駕しているのだと言っているのである。

その結果として、第二の点についての主張も以下のように展開される。「人間がすばらしく多様であるかぎり……自分たちの礼拝形式や生活形態と結びついた宗教的信仰の多様に異なる伝統が存続するであろう。……しかし人間が生み出したものとしてそうした靈的住まいはいずれも限界をもっており不完全であることをまぬがれない。いずれもが独自の強さと弱さを、また長所と短所とをもっているのである」¹⁰⁾。

以上のような宗教一般についての認識を基礎として、ヒックは自身がその信徒であるキリスト教について、それが有する歴史的性格に着目して以下のように主張する。「キリスト教は近代になってかなりの程度変容された初めての世界宗教であるという特徴がある。そしてここにキリスト教の眞の歴史的な独自性がある」と。そして、キリスト教徒に次のように呼びかける。多様でしかも常に成長して行くのがキリスト教の伝統であるか

ら、キリスト教徒は、人間の生活に存在する（キリスト教以外の）他の潮流のなかにも神が救済のために働いてくれているという発見に示唆をうけながら、キリスト教伝統からの離別ではなく、それをさらに展開して行くべきである¹¹⁾。

3 ヒックの展望

宗教の本質についての前述のような認識に立って、彼は今後の宗教について、以下のような展望を披歴する。「人間の宗教心は生得的なものであり、人間本性が本質的に同一である限り、宗教は何らかの形で存続する。……（表面的な）差異よりも、深く本質的な合意できることのほうが重要である、とみなす傾向が強まっている。この傾向を将来に見込むならば、キリスト教の姿をすでに大幅に変えたエキュメニカル（教会一致の）精神が、世界の諸宗教間の関係にもいつそう大きな影響を及ぼすだろう。……宗教間の関係は、この国におけるキリスト教の諸宗派間の関係にも似たものになりうるだろう」¹²⁾。

ここでヒックは、キリスト教のみならず他の宗教も変化するものであることを想定している。この宗教が変化するという思想は、きわめて重要でありかつ冷静なものである。なぜならば、宗教というものは人間の生の本質に深く関わるものとして、各自の自同性 Identity の拠り所とされるゆえに、ほとんどの信徒は、自らの信じる宗教は最終的な価値を自分たちに提示してくれているのであって、それが変化の可能性を有することは認めたくない、と思考する傾向が強いからである。実際に諸宗教の

「熱心な」信徒ほど、自らが信じる宗教のいつさいの変化を容認せずに、むしろ原初形態に戻ることが正しい信仰のあり方であると考えがちとなる。それが「原理主義」と言われる宗教運動となるわけである。そして、この方向は、ほとんどの場合が排他主義的傾向と不寛容を示すことになるのである。

ところがヒックは、あくまでも冷静に思考を展開して、次のように彼は言う。宗教が変化するとしても、その結果として単一の世界宗教 a single world religion というものが成立すると考えているわけでもないし、それが望まれていることでもない。自分の望みは、それぞれの異なる宗教的伝統が互いに敵対する観念的共同体と見なすことのない状況だとするのである。⁽¹⁴⁾

そして、どの宗教も変化するが、それは、われわれ自身とわれわれの環境に関する近代的な知識の枠組みの内部で人間の霊性が変容を受けつつも、超越と関わることができるような信仰となるだろうとする。⁽¹⁵⁾ つまり、救済への道はいくつもあるのであって、キリスト教はいくつもある道のなかの一つなのである。⁽¹⁶⁾ という認識に立って、ヒックは『バガヴァッド・ギーター』の一節を紹介している。「人がどのような近づき方をするにもせよ、私はそのとおりに応じる。なぜなら、どのみち人の選ぶ道は私の道に他ならない」。⁽¹⁷⁾

実は、人の歩む道のアナロジーで宗教寛容の思想を説くことは、ヒックの故国の伝統のなかにもある。その嚆矢は、一六世紀のトマス・モアの「道こそ違え目指す高嶺は一つの譬えにも

あるように、結局聖なる存在を拜むという点では一致している」と、いう著書『ユートピア』における主張である。一七世紀末にジョン・ロックもこの比喩を用いており、それはさらに一八世紀フランスの啓蒙思想家ヴォルテールにまで伝わっているのである。⁽¹⁸⁾ しかし、ここでヒックが、この伝統からではなく、あえてインドの『バガヴァッド・ギーター』における〈道の比喩〉を提示してきたという点に、彼の宗教的多元主義の立場が明確に表現されているととらえることができるであろう。

二 包括主義 inclusivism

包括主義とは、ヒックの定義によると、「他宗教に対して敵対的ではないが、キリスト教が完全な神の啓示と正しい救いの出来事の唯一の所在であるととする立場」である。⁽¹⁹⁾

1 デコスタの主張

デコスタ (Gavin D. Costa, 1958-) はケニアのナイロビに生まれた後、一九六八年にイギリスに渡った人である。イギリスでの初等・中等教育を経て、バーミンガム大学に入学し、そこで神学をヒックのもとで学んだ。引き続きケンブリッジ大学にも学んだ後、現在はブリストル大学の「宗教と神学」学部の教授であり、自己の研究分野として、「現代カトリック神学」、「組織神学」、「諸宗教の神学」、「そして宗教的多元論に関わる哲学的神学の諸側面」を挙げている。⁽²⁰⁾ ここでは、彼の編著書である

Christian Uniqueness Reconsidered - The myth of a pluralistic

theology of religions⁽²¹⁾に収載されているデコスタの論文を中心に
して彼の「包括主義」を紹介したい。

2 デコスタの思考の大前提

彼は自身の考察の大前提として次のように記している。「私のアプローチは、宗教が多元的であることを承認しつつ、その多様性を理解するための適切な評価基準を設定しようとする。それは三位一体論 Trinity⁽²²⁾である」。実際に彼は自身の思考を展開するに際して、三位一体論を、とりわけその一位格たる聖霊の働きを中心に据えている。

3 デコスタの深い包括主義

彼は、父なる神は聖霊と子によって明らかにされると言う⁽²³⁾。同時に興味深いことには、「神をさらに深く理解するようにと、聖霊が思わぬ仕方であれわれをたえず招き続ける」とも言うのである。ここから彼は、キリスト教徒が他の宗教に対する肯定的な態度をとることの必要性を説く。「非キリスト教徒の物語に注意を向けることは、神に対して、そして隣人に対して、開かれていくことである⁽²⁴⁾」と。その結果、デコスタにおいては、宗教間の対話はすべてのキリスト教徒にとっての責務であるとされることになる⁽²⁵⁾。

さらに彼は、キリスト教からの一方的な「包括主義」の立場を安易に主張するわけではない。キリスト教の教会は聖霊の審きの下にあるので、諸宗教の存在はキリスト教信仰にとって決定的に重要な意義をもつるのである⁽²⁷⁾。その上でデコスタ

は、キリスト教の土着化 indigenization についても深い考察を展開している。「キリスト教は物語や範例と言う形式を用いるため、土着化の過程において、別の伝統の要素がそれ自身の物語構造や範例的な法則や手順に従いつつキリスト教に採り入れられてゆくのは避けられないことである⁽²⁸⁾」。しかし、そのことが、それらの伝統を実践してきた非キリスト教徒をキリスト教徒に数え入れることにつながることはならないとする。

こう述べた上でデコスタは、聖職者の祭服、剃髪、結婚指輪、東を向くこと、キリエ・エレイソンを歌うこと等の、すでにキリスト教内部に伝統として定着している要素が、キリスト教の発展途上で他の伝統から受容されたものであるとしつつ、このようなことが成立する構造は、「(トマス・)アクイナスが神の啓示の深みを明瞭に表現しようとしてアリストテレスを利用したのと同じ」であるとする⁽²⁹⁾。そして、この伝統的な構造が示すことは、しばしば言われるような、「キリスト教は他の宗教を成就するが、キリスト教自身は完全に成就している」というキリスト教における「成就」概念の理解とは正反対のことであり、今もなおキリスト教も不完全であり、自己成就する必要があることを証言しているのだ、と言う⁽³⁰⁾。

4 デコスタの結論

以上のような自省的で深い考察を経たデコスタは、以下のよう
に言う。「ここに提唱される三一論的キリスト論は、キリス
トの特殊性の排他主義的な強調と、歴史における神の普遍的な

はたらきの多元主義的な強調との双方を調和させるといふ利点をもっている」と⁽³¹⁾。さらに彼は、自身の提唱する三一論的キリスト論は、次の二点で世界の諸宗教に開かれているとする。その第一は、三一論的キリスト論が、アブリオリな批判もアブリオリな肯定も共に拒むという点で、世界の諸宗教に開かれている⁽³²⁾。第二には、それが他宗教の人びとの信仰の証言から、聖霊を通して神の声を聞くことを衷心から承認し期待するという点でも、開かれている。そして、そのような証言が、キリスト教の神学と実践に対する審きを担う場合もありうるともする⁽³³⁾。

しかし彼は、他宗教の人びとの証言が福音に反する自己欺瞞や隷属的な生を暴露するのであれば、キリスト教徒は世界の諸宗教に問いを投げかけ、あるいは対決もしなければならぬであろう、とした上で、「対話においては、このように相互に関連する特定の課題があり、その課題のなかには、一宗教にとつて対外的なものもあれば対内的なものもある。しかし、『The Myth of Christian Uniqueness』の執筆者の多くが提唱する多元主義は、……これらの課題に十分に対応できないように思われる⁽³⁴⁾』として、ヒックらの立場から距離をとっている。

しかしながら、ヒックらの多元主義が、デコスタの言うように宗教同士での論争や対決を成立させないものであるかどうかは、デコスタの言う「論争や対決」がどのようなものを意味しているかによると思われる。相手の信仰を尊重しつつも、その内容について問い質して論争することは可能だからである。

三 再び宗教的多元論の視点から

——ドライヴァーの考察

ここで再び宗教的多元論に戻って、トム・ドライヴァー(Tom F. Driver 1925 -)が『The Myth of Christian Uniqueness』の最後に『The Case for Pluralism』(多元主義の主張)という文章をもって主張しているところを紹介したい。このニューヨークのユニオン神学校の元教授が主張するところは、きわめて自省的であると共に現代的でもある。まず彼は、「われわれが自身の内に包括主義の慣性を全くもっていないとほめかすことは誤りである」と指摘する⁽³⁵⁾。その上で、以下のような諸点を主張する。

多元主義はキリスト教徒自身の歴史によって自身に課された要請である。なぜならば、キリスト教が世界に広がったほとんどの場合、諸民族による冒険的植民を伴い、しばしばそれを合理化してきたという意味において、キリスト教徒の歴史の大部分は「普遍的植民地主義」の歴史であり続けたのだからである⁽³⁶⁾。

さらに彼は宗教一般における歴史性に注目して、以下のような主張をする。諸宗教の間に見られる主な違いは、儀式や象徴にあるのではなく、また教理的哲学的レベルの違いにあるのではなく、それは歴史である。さらに、人物や民族が歴史的に生成したものであるのと同様に、宗教も歴史的に生成してきたものであり、それ自身のうちにその歴史を担っているものと共に、さらに富、貧困、生産手段、階級闘争が歴史に属す

るように、宗教も歴史に属するものである。⁽³⁷⁾

ドライヴァーがこのような主張をもって明らかにしようとしていることは、現に存在している宗教は、たとえそれがそれぞれの宗教の信者にとって「絶対的なもの」であるように見えるとしても、歴史的に変化してきているものなのであり、それは他の宗教についても妥当する事実であるということであろう。

そして彼は次のように言う。「実際にキリスト教徒はきわめて多様なキリストを礼拝してきているのであり、これはキリストの死と復活の後の数十年以来、そのように行ってきたのである。この多様性を否定することは唯一のキリストをねつ造することにつながる。このような礼拝は否定を基盤としていて、それゆえに偶像崇拜的となる」と。

さらに彼は、人類に歴史があるだけでなく、神にも歴史があるということに許容せざるをえないとする。⁽³⁸⁾しかしこれは、伝統的なキリスト教の歴史理解とは大いに異なる主張である。伝統的なそれは、神が歴史をつくるのであり、神は歴史のなかで働いているけれども、その本質は時間と空間を超越して存在している、とするものだからである。

だがドライヴァーは、このような「神の超越性という不幸な概念」⁽³⁹⁾ an unfortunate concept of divine transcendence は、「キリストとしてのイエス」という現実を「見せかけのもの」⁽⁴⁰⁾ apparent として「象徴的である」⁽⁴¹⁾ symbolic とみなすことになつてしまうから、不適切であるとするとする。そして彼は、神の超

越が徹底的な内在として、transcendence as radical immanence 理解されるべきだと提案している。その具体的なあり方は、「神は被造物の世界に、より少なくではなくより多く、関与することによって人間を超える」というのである。⁽⁴²⁾

それゆえに彼は、「神が全世界の歴史に対する摂理的な監督であるとするだけでは十分だとはおもわないので、（神は歴史への）『参加者』⁽⁴³⁾ participant なのだということ自分を強調する」と言う。この視点に立つならば、諸民族の歴史が多様であるということは、神の関与が多様であるということの意味することになる。この点からドライヴァーは重要な帰結を導き出す。「多元主義の観点に立てば、神は一つの本性を有するが、それが異なった宗教的伝統において多様にまた不適切に表現されているのだ、という単純なことにはならない。それは、神性それ自体のなかに現実的で真正な相違が存在するということであり、それは神が非常に多様な人間の共同体に対してなしてきた多様な関与のためである」⁽⁴⁴⁾。こう述べることで、彼の議論は重要な深みに歩み入ることになる。続々章の冒頭で以下のように言う。「いかなる意味で神あるいは世界が『一』であるのかを知ることは容易ではない。神は一である。世界それ自体は単数である。しかし、神の道と歴史とが名づけられうるもの以上のものであるかぎり、神は多である。……世界それ自体は単数であるが、出来事は地球上に分歧しているように思われる」⁽⁴⁵⁾。

つまりここでは、宗教の場では「一」であることがいかなる

意味となるかが問われることになり、それは仏教における「不二」の思想とか、キリスト教神秘主義における「数を超えた一」の思想とかに関わることが予想されるが、ドライヴァーはそれには関わらないと声明する⁽⁴⁴⁾。そして彼の関心はむしろ実践と関わる多元主義に向かうのである。「多元主義の恩恵のひとつは自分の神学的陣営を正すように進めることである」としつつ、彼は「多元主義への関心と正義への関心との間の積極的な相関性⁽⁴⁶⁾」を注視する。そのために彼は、多元主義が現代のわれわれの眼前に生じている諸問題といかに関わるべきかを問題にすることになる。「多元主義の議論全体の上に植民地主義、新植民地主義、帝国主義、弱者の搾取、戦争という妖怪がのしかかっている。この歴史が多元主義というテーマを緊急なものとしているのである。テクノロジードキだけでは、不正が消滅することもなく、相違におのずと橋が架かることもないという一ことを、われわれは不幸にも学んだ。これらのことが解放の実践を要求しているのである。多元主義を単なる寛容さに退化させることから救うことができるのは、構造的な不正を根絶するために必要とされる献身が行われる実践だけである⁽⁴⁷⁾」。

このようなドライヴァーの主張は、色あせることのない深い内容をもつものであると言えるだろう。

彼の鋭敏な視点は、自らもその一人である多元主義の立場に立つ専門家にも向けられているのであり、それゆえに彼は以下のように記しつつ、この論文をしめくくっているのである。「多

元主義の主張がエリート主義と自己満足から自らを守るためには、個々の宗教が偶像崇拜から免れるのは、『他者性』や多様性についての考察によってのみならず、貧しい人々のための献身と行動によってでもあるということをも、多元主義の主張自身が理解しなければならぬのである。……超越は思想または祈りの事柄にすぎないのではない。それは、第一に、そして最後に、自分の命を与えることが求められているもののために働く行為である。超越とは徹底的な内在である。普遍的なものへの道は、解放の実践という特別な小径を通るのである⁽⁴⁸⁾」。

(1) シンボジウムでは、以上の三人に加えて、簡単にニコラウス・クザーヌス (Nicolaus Cusanus, 1401-1464) の思想にも言及したが、本稿においては紙幅の関係からクザーヌスへの論及は省略する。ヒック、デコスタらの先駆者としても見なすことができるクザーヌスの宗教寛容論については、拙著『クザーヌス 生きていた中世』(ぶねうま舎、二〇一七年)を、とくに第II部第一章を参照されたい。

(2) Hick, John, *God has many names* (以下 *Names*), *The Macmillan Press*, 1980 (問瀬啓允訳「神は多くの名前をもつ」(以下「名前」) 岩波書店、一九八六年)。

(3) Hick and Knitter (ed.), *The Myth of Christian Uniqueness* (以下 *Myth*), N. Y., Orbis, 1987.

(4) Hick, *Names*, p. 44 (「名前」九三頁)。

(5) トゥールのグレゴリウス『歴史十巻』(フランク史) I 第二巻三頁以下)に、フランク王国の王になったクロウヴィスがカトリック・キリスト教に改宗することで、「かれの軍隊のうちの三〇〇〇人以上のものが洗礼を受けた」と、その一連の経緯が記されている。

- (6) ジャレド・M・ダイアモンドがその著書『銃・病原菌・鉄』（倉骨彰訳、草思社文庫、二〇一二年）のなかで、この点を繰り返し強調してゐる。例えば下巻一〇二頁。
- (7) 注(13)を参照されたい。
- (8) *Myth*, p.22 (『超克』五三頁)。
- (9) *Names*, p.48 (『名前』一〇三頁)。
- (10) *Names*, p.7f. (同上書、一五頁)。
- (11) *Myth*, p.28 (『超克』六五頁)。
- (12) *Myth*, p.33 (同上書、七四頁)。
- (13) *Names*, p.57f. (『名前』一一〇頁以下)。
- (14) *Names*, p.58 (同上書、一一二頁)。「単一の世界宗教」の成立を考へなごうとヘックの立場は、ハンナ・アーレントの洞察と共通するものがある。以下を参照された。 Hannah Arendt, *Men in Dark Times*, San Diego/ New York/ London, Harcourt, Brace & World, 1968, p.89 (阿部斉訳『暗い時代の人々』河出書房新社、一九九五年、一一三頁)。
- (15) *Myth*, p.26 (『超克』六一頁)。
- (16) *Myth*, p.33 (同上書、七四頁)。
- (17) *Names*, p.58 (『名前』一一三頁)。
- (18) この点については、筆者の上掲書三四七頁以下で言及してゐる。
- (19) *Myth*, p.22 (『超克』五三頁)。
- (20) 同大学のホーム・ページの記述による。
- (21) *Christian Uniqueness Reconsidered - The myth of a pluralistic theology of religions*, New York, Orbis Books, 1990. なお、この本に収載された一四本の論文のなかから一〇本を訳して一書にしたものが、森本あんり訳『キリスト教は他宗教をどう考えるか——ポスト多元主義の宗教と神学』(教文館、一九九七年) (以下『他宗教』)であり、その一〇本のなかにデコスタの当該論文も入ってゐる。
- (22) *Ibid.*, p.16 (『他宗教』三七頁)。
- (23) *Ibid.*, p.18 (同上書、四二頁)。
- (24) *Ibid.*, p.19 (同上書、四二頁)。
- (25) *Ibid.* (同上書、四三頁)。
- (26) *Ibid.*, p.20 (『他宗教』四五頁)。
- (27) *Ibid.*, p.22 (同上書、四九頁)。さらに、他の宗教の証言がキリスト教の神学と実践に対する審きを担う場合もありうるとなえもする。注(30)を参照された。
- (28) *Ibid.*, p.25f. (同上書、五六頁)。
- (29) *Ibid.*, p.26 (同上書、五六頁)。
- (30) *Ibid.* (同上書、五六頁以下)。
- (31) *Ibid.*, 26 (同上書、五七頁)。
- (32) *Ibid.*, 27 (同上書、五八頁)。
- (33)(34) *Ibid.* (同上書、五八頁)。
- (35) Driver, "The Case for Pluralism", in: *The Myth*, p.204 (多元主義の擁護)『超克』三三三頁)。
- (36) *Ibid.*, p.207 (同上書、三九九頁以下)。
- (37) *Ibid.*, p.210 (同上書、四〇六頁)。
- (38) *Ibid.*, p.216 (同上書、四一七頁)。
- (39) *Ibid.*, p.211 (同上書、四〇八頁)。
- (40) *Ibid.*, p.212 (同上書、四〇九頁)。
- (41) *Ibid.* (同上書、四〇九頁)。
- (42)(43) *Ibid.* (同上書、四一〇頁)。
- (44) 「私が語っている多元主義の観点のためにいくつかの物理的、形而上学的議論を援用することができるにちがいないが、私はここでそれを行わなう。興味深いけれど、そのような議論は決定的ではない」といふこと (*Ibid.*, p.213, 同上書、四一一頁)。
- (45) *Ibid.*, p.215 (同上書、四一六頁)。
- (46) *Ibid.*, p.216 (同上書、四一八頁)。
- (47) *Ibid.*, p.217 (同上書、四一九頁)。
- (48) *Ibid.*, p.217 (同上書、四二〇頁)。

(やまぎ・かずひ) 西洋哲学、早稲田大学教授